

近世・肥後を拓いた巨人

加藤清正

抜けるような秋の空だ。真白い雲が一つ、ゆっくりと流れていく。やわらかな日射しを受けて、川面がキラキラと輝いている。清正は足を止め、まぶしそうに目を細めた。

関が原の戦から数年、肥後の大地は大きく変貌しようとしていた。清正の手による大規模な土木工事が進められていたのである。清正は暇をみては、領内を巡検した。工事の施工中は勿論完成後の状況、開墾、灌漑の実情をつぶさに調べる事が習わしとなっていたのだ。緑川上流に位置するこの甲佐地方も、前年工事が完了したばかりだ。

阿蘇の南麓から山地の谷間を流れ平野に出る緑川は、水勢が激しい上に護岸設備が皆無で、出水や氾濫も珍しくなかった。兩岸の流域一帯は、いつも泥沼のようになる有様だった。清正はこの暴れ川を掘り替え、南を流れる釈迦院川との合流点をはるか上流に持ってきた。そして、新旧両川が分かれる上

流の鵜の瀬に大きな堰を作り、そこから井手を掘って縦横に水を引いた。これによって新たに約三百町の田畑が開かれた。

「お殿様。」不意に清正の傍に二人の老人が歩み寄った。両手で米を差し出している。前年の工事で開かれた新田から採れたばかりのものだと言う。清正はそれをつまみ、口の中に入れた。「これは貴重な米だ。さあ皆も食え。」そう言うと、側近達にも少しずつ分配した。「うむ。良くできています。でかしたぞ。」清正は満足そうに笑い、また、ゆっくりと歩き始めた。

自然を大改造

天正十六年（一五八八）六月、加藤清正は肥後北半（二十五万石の領主として入国した。当時、肥後の国土はまさに荒廃しきっていた。菊池氏の没落後、土豪が割拠して小競合いに明け暮れる一方、大友・島津が押し寄せ、混乱状

態が続いていた。阿蘇、菊池、益城等の山林は乱伐されたまま植林も行なわれておらず、雨が長く続くとすぐ洪水になった。川を渡るにも橋がなく、交通は麻痺状態であった。

清正はこの荒れ果てた領土を復興させる事が、民政安定の第一であると考えた。事態は急を要している。しかし、一時凌ぎの応急策は採らなかつた。重臣達を連れて領内を詳しく巡検し、綿密な基礎調査を繰り返した。それは、何日もの間縄を流して川の流れを調べたり、自ら水中に潜って川底の状態を観察するなど、徹底したものだった。清正は折にふれて「後の世のため」という言葉を口にしていったという。工事を単に治水のためばかりでなく、灌漑、開拓、干拓等の総合的視野で捉え、肥後百年の国造りに黙々と取り組もうというのである。また、こうした調査と平行して、若木の伐採を禁止、古木を伐採した際には必ず植林するよう命じ

たり、河原の石を採る事や、許可なく川から水を引く事を禁止、大雨による出水に備えた。さらに、災害の際には日頃蓄えていた米や塩を領民に分配し、家を失った者には城内にある長屋に住む事を許した。こうして、清正入国後の肥後では、大水その他で死者を出す事はほとんどなくなり、領内は活気を取り戻した。

清正の周到で行き届いた配慮は、工事の際にも発揮された。原案が出来ると重臣達と何日も論議を繰り返し、いきづまると、実際に現場に赴いて検討した。夜を徹して原案作りで没頭する事も珍しくなかつた。また、現場での指揮には毎日城から通ったが、遠い場合は現地に宿泊した。夜になると、土地の者達を集め、工事の見通しを築しげに語り聞かせたという。また、土地の者の意見を入れて、工事を追加したり、訂正したりする事も度々あったと伝えられている。

関が原の戦（一六〇〇）後、肥後全土五十二万石の領主となった清正はいよいよ領土の自然の大改造に情熱を注いだ。これによって新たに耕作が可能になった土地は、一万五千町歩にも及び、米の増収は実に二十一万石にも上ったという。まさに清正は、肥後の農業を蘇らせ、その後の経済発展の基礎を作ったのである。肥後の近世は清正が拓いたと言っても過言ではないだろう。

巨大な遺産

戦国時代は、力の時代であった。強い者が弱い者を倒し、領土を広げる。その繰り返しの中で、多くの戦国武将が現れ、あるいは消えていった。彼らは皆、遠大な野心に満ち、権謀術策の

限りを尽くした。こうした意味においては、清正を典型的な戦国武将と呼ぶのには、無理があるように思われる。確かに彼は武術に勝れ、常勝不敗の武将だった。しかし、その戦いはいつも他動的なものであり、自らの欲望によって家臣団を動かした事は一度もなかつた。清正は諸国を攻略し、天下を望むような野心など持ち合わせていなかった。のである。彼は淡泊で、直情一徹の人柄だった。信義に厚く、何よりも人倫を重んじた。日頃は、質素な洗い晒しの木綿の着物を着、食事も家臣達と同じものをとっていたという。私生活を切りつめ、土木工事や寺社の修復な

どの公的なものに惜しみなく財をつぎ込んだのである。彼の心はいつも肥後の領土と、その領民に向けられていた。そこには驕奢を潔しとしない精神があった。自らの信じた道を極めようとするひたむきな情熱と、人間への深い愛情があった。

こうした清正の生きざまは、彼の死後も肥後人の精神の上に大きな足跡を残した。壮大な城や優れた土木工事のみならず、清正という人間の存在そのものが、その後の肥後への巨大な遺産だったのである。

清正の肥後入国から、今年はずっと四百年目にあたる。

参考文献

「熊本県人 渡辺京二」
「清正の治政」片山文士
「加藤清正」安藤英男

